

国際文化学部だより

山口県立大学国際文化学部

〒753-8502 山口市桜島3丁目2番1号

(大 学) TEL: 083(928)0211 FAX: 083(928)2251

(学部事務室) TEL/FAX: 083(928)3423

H P: <http://www.ypu.jp/gakubu/ic/kokubuntop.html>

e-mail: kokusai-jimu@fis.ypu.jp

No. 19

発行 / 2013年10月1日



国際文化学部長
岩野 雅子

グローバルに展開する国際文化学部

昨年10月に学部だよりをお届けして、はや一年が経ちます。この間、本学が文部科学省「グローバル人材育成推進事業(タイプB:特色型)」に申請した取組が採択され、国際文化学部においてグローバル人材育成教育プログラムが始まりました。「タイプB:特色型」には全国の国公立大学等から111件の申請があり、31件が採択されました。公立大学では、本学を含めて3校のみとなります。詳しくは、この学部だよりに掲載されている「グローバル人材育成推進事業が生み出す変化」をご覧ください。

日本社会が求めているグローバル人材育成は、これまでの大学生を対象としたものから、今後は高校生を対象としたプログラムへと裾野を広げていきます。私たちが打ち出す新しいグローバル人材のモデルを、県内外の大学はもちろん、高校生に対しても紹介し、成果を公開していきたいと思っております。

今年3月に卒業した学生の就職率は、国際文化学科が95.5%、文化創造学科が95.8%でした。国際文化学科生は、東急リゾートサービス・日本航空・九州旅客鉄道・新日本製薬をはじめとする各種企業や県内外の銀行、テレビ局、県内外の高校教員(英語)、国家公務員や地方公務員等になっています。文化創造学科生は、NHK広島放送局・TYSテレビジョン・萩ケーブルテレビ・南日本リビング新聞社等のメディア産業をはじめ、県内外のデザイン関連企業、県内外の高校教員(国語)、県や市町村職員、司書・司書教諭等で活躍する場へと出ております。詳しくは本学ホームページ(<http://www.ypu.jp/syusyoku>)から各学科の就職情報にアクセスしていただけます。

こうした従来の就職に加え、グローバル人材育成推進事業では、グローバルに展開する企業人を招いた講義を1・2年生を対象に行い、早い時期からロジカルに、そして、クリティカルに考える思考の型を身につける授業を展開しています。また、3・4年生を対象に具体的課題を企業から学ぶ機会を用意し、希望する学生には海外留学や海外インターンシップ、国内外で展開する産学公連携コンソーシアム等の研修などを通して就職につなげる場を用意します。

国際文化学部が育てるグローバル人材は、「軽々と大空に羽ばたき」「地に根を下ろす」ことを繰り返す希望の花「タンポポ」のような存在感がある人材です。世界と地域とのバランスある視点を持ち、それぞれが置かれた場に溶け込み、内外の空気の流れを生み出す力を使って各方面で活躍してくれると確信しています。

そんな国際文化学部生にエールを送っていただきますよう、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



トキメキ! ヒラメキ! キラメキ!

山口県立大学 国際文化学部



グローバル人材育成推進事業

グローバル人材育成推進事業が生み出す変化

グローバル人材育成推進事業総括 シャルコフ・ロバート
副総括(プロジェクトマネジャー) 樫部 正樹
副総括(教育担当) 岩野 雅子

本学では、世界の舞台上で活躍できる人材を育成すると同時に、グローバルな視点や留学経験を持って地域社会で活躍できる人材育成にも力を入れています。自分の生きていく「**地域社会**」と「**グローバル社会**」の架け橋になる人材。私たちはこの人材を「**インターローカル人材**」と呼んでいます。国境を越えて、地域の課題解決に向かう姿勢をもち、地域の資源の可能性に着目し、地域「ローカルの強み」を世界「インターナショナル」に「売り込める」力を有する人材です。これからの日本社会はこのような人材を求めています。



このインターローカル人材を育成するため、異文化間コミュニケーション力育成を取り入れた外国語学習プログラムに加え、産業界、金融機関、行政、海外大学、国内外のNPOやNGOと連携し、留学経験を取り入れた学習プログラムを構築しました。これを「**域学共創学習プログラム**」と言います。このプログラムでは、本学が知識や学びの場

を提供し、学生が地元をはじめとする企業、銀行、行政、民間団体のキーパーソンから地域課題や地域資源について学びます。そして、学んだことの中から一つのテーマを選び、実態調査やインターンシップなどを通じて、そのテーマについて理解を深め、地域課題を背負って海外留学に出かけます。留学先では通常の科目履修に加え、フィールドワークなどを通して、この地域課題をグローバルな観点から学びます。帰国後は海外で得た情報や知識などを留学前にお世話になった自治体や企業などに還元します。これらの活動を通して学生は社会人としての人間力を育み、企業等にとってはグローバル人材を採用する機会を得ることになります。また、実践経験により学生は地域社会の一員として活躍する手法や意義を学び、将来にわたって活用できるネットワークを築くこともできます。



海外研修や海外留学には資金が必要ですが、学生には自己管理(時間、経費、学習計

画等のマネジメント)について指導するとともに、経済的支援策として、日本学生支援機構から多大な奨学金をいただいています。奨学金のおかげで昨年度は160名を超える学生が短期研修で海外に出かけることができました。7つの姉妹大学への1年間にわたる交換留学においても経済的支援を行っています。一度、外から自分の足元を問い直す体験をした学生は、モノを見る目が違ってきます。

昨年10月に事業に採択されて一年を迎える今、グローバル人材育成事業はこれから本格化していきます。国際文化学部から巣立つ学生には、日本政府や学内外の数多くの専門家の支援を受けていることを自覚して、この貴重な機会を十分に使いこなし、期待に応えてほしいと願っています。

この学部だよりと同封している「**グローバル人材の旅へ**」は、国際文化学部生全員へ、そして、これから本学部入学を考えている高校生・保護者・高校関係者のみなさんにも配布したパンフレットです。刻々と進行する事業の内容については、本学ホームページでも公開しています。

(<http://www.ypu.jp/sinka/global-top.html>)

海外研修・海外留学プログラム

国際文化学部生が参加する海外研修・海外留学プログラムには、次のようなものがあります。

- ・全学対象の語学文化研修(中国、韓国、カナダ): 1か月以内
- ・全学対象の交換留学(中国、韓国、アメリカ、カナダ、フィンランド、スペイン): 1年以内
- ・海外スタディーツアー(13プログラム程度)・地域実習(海外): 2週間程度
- ・日本語教育実習: 1か月程度

昨年度は160名を超える学生が以下のようなテーマで海外スタディーツアーに参加し、現地での視察や調査、交流などを行いました。本年度も多彩なプログラムで実施中です。

- ・多文化国家を学ぶスタディーツアー(シンガポール)
- ・韓国文化発見フィールドワーク
- ・極北の資源を背景としたデザインについての文化比較研修(フィンランド)
- ・ハワイの高齢者を対象とした調査・研修(アメリカ)
- ・香港から中華圏・アジアにおける表現、視点を学ぶ
- ・貧者のためのデザインと開発人類学(インドネシア)
- ・心の国境を超え隊:対話でつくる日韓関係
- ・台湾における古建築再生におけるアートマネジメントと服飾デザインを学ぶ
- ・中国少数民族(チワン族)の言語文化の調査・研修
- ・タイ、ミャンマー国連難民キャンプへのスタディーツアー
- ・日韓における地域資源を活かした服飾デザインの比較
- ・日本と台湾の文化交流の歴史に関するフィールドワーク

- ・地域文化を学ぶスタディーツアーの計画と実践(ドイツ)

本学部で学ぶ交換留学生も増えています。本年度前期は13名(カナダ5名、フィンランド2名、中国4名、韓国2名)、後期は11名(アメリカ6名、カナダ4名、フィンランド1名)が来学し、通年で中国4名、韓国2名も学んでいます。これに中国や韓国からの学部4年間の長期留学生も入れると、キャンパス内で国際交流が盛んにおこなわれていることがお分かりいただけると思います。

また、今年度は海外の姉妹大学に15名(中国3名、韓国2名、カナダ4名、センター3名、フィンランド2名、スペイン1名)を交換留学生として派遣しています。

学生のグローバル展開

学生の「変化」を促す教員の視点と、「変化」する学生自身の視点の両方から



アクティブラーニングスタジオ(Y-ACT)で域学共創学習プログラムを展開

グローバル人材育成推進事業：プログラムコーディネーター(助教) 田村 瀬津子



文部科学省に採択された「グローバル人材育成推進事業」の取り組みの一環として、平成25年度4月より、最新の学習器材が装備された「アクティブ・ラーニング・スタジオ(Y-ACT)」をD24教室に開室しました。通常の授業や特別なイベントが開催されていない時間帯は、学生のラーニング・commons(自主学习スペース)として自由に利用できます。

ある統計によると、アメリカの大学では、一週間に11時間以上の自主学习をしている学生が60%弱を占めるのに対し、日本では15%弱にとどまっています。理由は様々考えられますが、アメリカの大学では、図書館やコンピューターラボが深夜までオープンしているなどの学習環境の違いがあります。国内外でグローバル人材の必要性が高まる中、最新の器材を使った質の高い自主学习を習慣づけることにより、国際文化学部生がグローバル人材として実力をつけたいけるよう、指導やサポートしていきたいと思っております。これから、どうぞよろしくお願いいたします。



アクティブラーニング・ランゲージラボ(Lalabo)でe-learningを運営

グローバル人材育成推進事業：言語演習コーディネーター(助教) 森原 彩



平成25年度4月より、「アクティブ・ラーニング・ランゲージ・ラボ(LaLabo)」がC館1Fに開設されました。ここでは、コンピュータやeラーニングを活用した最新型の言語教育を受けることができます。1人1台コンピュータが配置してあるため、授業でも自習でも自分のレベルに合わせて、効果的に言語学習に取り組むことができます。授

業以外は自習教室として開放しています。

グローバル人材に「国内外問わず、人とコミュニケーションをとる」能力は必要不可欠であり、「外国語運用力」が非常に重要です。外国語習得に近道はありません。日々の学習の積み重ねが大事です。だからこそ、明確な目標を持って、「楽しい」と感じたり、やりがいを感じる学習法開拓が必要です。学生個人の目標とニーズにあった学習法を一緒に探しながら、「やらされている」という受け身の学習から「自分からやる」という能動的な学習へ変換できるよう、しっかりサポートしていきます。



グローバルカフェで海外のことを知ろう!

グローバル人材育成推進事業教育チーム



食堂の一角に現れたグローバルカフェ。海外研修の写真が並び、留学に関する資料の前で、学生スタッフや教職員に相談する風景が見られます。これは、7月から始まった気軽に海外留学について相談しよう!というコーナーです。

短期間の海外研修や長期留学にはどのようなタイミングで行けばよいのか。どのような準備をして、どのような科目を取り、語学レベル

はどのくらい必要なのか。経費はどうしたらよいのか、奨学金は…といった具体的な相談に応じていくため、グローバル人材育成推進事業で毎月1回程度開催していきます。新しく留学促進チームも立ち上がり、さまざまな趣向でのグローバルカフェが展開していく予定です。

7月25日に開催した第1回目のグローバルカフェでは、国際文化学部をはじめ、社会福祉学部や看護栄養学部の学生たちも興味があるようで、資料を見に来てくれました。学内にいろいろなチャンスがあることを、もっとよく知っていただくべく、これからも、気軽に立ち寄れる場をつくっていききたいと思います。

ビフォー → アフター

before

国際文化
学科生

国際文化学科 教授 松田 理

4月4日から5日にかけて、1年生全員が秋吉台国際芸術村における宿泊オリエンテーションに参加しました。今年は2日とも良い天気恵まれ、到着した私たちを迎えてくれたのは満開のヤマザクラと梨の花、それと谷に響き渡るウグイスの声でした。最初のプログラムは、JICA国際協力推進員である長濱真紀さんの開発途上国における体験談とワークショップです。学生たちは日頃意識しない世界に目を向け、文化の多様性に感動を覚えたはず。次のプログラムは上級生リーダーたちによる履修登録等のアドバイスです。

履修登録は1年生が最初に遭遇する難解なハードルですが、上級生の体験に基づくアドバイスは的確で、不安でいっぱい1年生たちも理解が進むにつれて少し安心してきます。

夕食後も交流会や茶話会が開かれ、上級生や同行教員たちに個別に質問できるので不安はさらに少なくなります。このようにして1日目が終わったころには、友達もできています。2日目は上級生の留学体験談、そして秋芳洞を経て秋吉台ウォーキングです。ひと汗かいたのち、夕方には全員無事で大学に到着しました。



after

国際文化
学科生

国際文化学科 学科長 ウィルソン・エイミー

毎年2月上旬に卒業を控えている学生が最終発表会を行います。一人の発表時間は15分。それぞれが取り組んできた研究課題についてプレゼンテーションを行います。4年生にとっては社会人になる前の教育機関での最後の大きな試練となります。何度もリハーサルを行い、5分間の質疑応答にも対応できるように準備します。

発表会場には、研究室で一緒に学んできた同級生や後輩、指導教員に加え、これから専門演習を選択する1、2年生も多く参加しています。発表に対する評価表を記入する「ピア・レビュー」も受け取ります。プレゼンテーションソフトを利用して視覚的にも分かりやすいように工夫したり、配布資料に改善を加えたりと、ここ数年、発表の技術は上達してきました。英語で発表する学生もおり、高校生も聴講にきます。

この壁を越えた先にあるのが3月の卒業式です。中学、高校のそれぞれの3年間に比べれば、大学の4年間で得た知識や体験には、はかり得ないほどの重さと大きさがあります。



before

文化創造
学科生

文化創造学科 講師 倉田 研治

歴史ある萩城下を中心とした、恒例の宿泊オリエンテーションが行われました。松陰神社の見学から始まり、宿舎での履修サポート、作曲者である田村教授による大学学生歌レクチャー、上級生による大学生活プレゼンテーションやレクリエーション、食事の際も日本文化について学ぶなど序盤から充実した内容でした。緊張していた新入生も、徐々に打ち解けていき、同級生、上級生、教員との交流や会話も時間の経過とともにどんどん増えていきました。

このオリエンテーションの特色である、上級生企画による萩城下の散策ツアーも晴天のもと行われました。グループに分かれて、上級生の解説から学び、時間いっぱいまで歩き、地域の文化に触れる充実したフィールドワークを経験しました。「来年は自分が企画して、新入生を案内したい!!」という、うれしい意見も聞こえてきました。それぞれの思い描く大学生活を、山口というフィールドを活かして、具体的にしていってほしいと感じました。



after

文化創造
学科生

文化創造学科 学科長 井生 文隆

文化創造学科では3回目となる卒業生を社会におくりだすことができました。グローバルな視野に立ち、地域に軸足を置いて、その資源、歴史、文化などを掘り起こすことにより新しい価値を探索し、未来の豊かな生活のための文化(モノ・コト・イミ)を創造し、広く提言・発信できる能力を学んだ学生が、新しい環境で活躍することを期待しています。

社会で活動をして行く中で、最初は情熱と努力で頑張るステップ、2つめは情熱と努力で培った知識と知恵で取組んでいくステップ、3つめはその人の存在だけで色々な事が進むという3つのステップがあると考えます。どれだけ最初に一所懸命に頑張れるかで、後々の成果の質と量、幅と深さなどが決まるということです。このことは全てにあてはまります。

新しい環境へ向かっていく卒業生の皆さんは、まず情熱と努力でひたむきに挑戦してほしいと思います。今やるべきことを地道に継続していくと、将来必ず夢が達成できると考えています。





4年間の成果



国際文化学科 教授 林 炫情

2012年12月15日(土)に、第9回マルチリンガル・スピーチ・コンテストが開催されました。第9回のテーマは「えん」。コンテストでは、この文字から発想する主題を自由に選ぶことができます。高校生の部では5人が出場権を得て、「炎」「怨」「縁」「遠」「炎」というテーマで発表しました。大学生・一般の部では「円」「縁」「演」「炎」などのテーマで、4人とグループが発表を行いました。

このスピーチ・コンテストの特徴は多言語であるこ

と。日本語・英語・中国語・韓国語・スペイン語・手話から2つを組み合わせ、8分以内で競います。お互いが異なる言語を選ぶ驚きがあり、会場に来られた多くの方々に多言語に触れていただく機会となっています。高校生の部では、最優秀賞・優秀賞ともに山口県立華陵高等学校の1年生でした。大学生・一般の部の最優秀賞は曲阜師範大学から本学部への交換留学生袁媛(エン エン)さん。優秀賞は国際文化学部3年韓国語研究室の6名のチーム(河村綾香、林美沙紀、福田美佐子、丸谷せな、松原なみほ、米澤直)でした。



国際文化学科 教授 馬 鳳如

「2013年度日本五星奨——九州・山口・沖縄地区中国語コンテスト兼第12回漢語橋——世界大学生中国語コンテスト日本代表予選」が、5月25日に北九州市立大学で行われました。スピーチコンテストの様子は、生中継の衛星放送を通じて全世界に公開されました。

国際文化学科4年生の遠藤史菜さんは、このコンテストの大学生スピーチ部門において最優秀賞を受賞し、7月に中国で開催された第12回「漢語橋」——世界大学生中国語大会

への出場権を獲得しました。また、国際文化学部2年の川端慶子さんは、大学生暗唱2部で最優秀賞を獲得し、中国広東外語外貿大学への一年間の留学の機会を得ました。

本学学生が世界中国語大会へ出場するのは7年ぶりです。世界中から集まった大学生と中国語を競い合い、また交流し、大きく成長して帰国した遠藤さんの笑顔に頼もしさを感じました。

遠藤さんはまた、第30回全日本中国語スピーチコンテスト全国大会(2013年1月13日開催、公益社団法人日本中国友好協会、東京)においても大学生部門で第2位を獲得しています。



文化創造学科 准教授 木越 俊介

これまで企画プロデュース系のみで行ってきた卒業展示を、12年度卒業生から装いも新たに「文化創造学科展+(プラス)」としてリニューアルしました。企画プロデュース系は、各学生の集大成となる制作物を、美術館の展示室を使用して発表しました。様々なアイデアや提案、そしてオリジナリティあふれる作品など、わたしたちの未来を豊かにするモノにあふれていま

た。日本文化系では、初めての試みとして、卒業論文のパネル展示を行いました。文章とはまた異なる方法で、より多くの人にアピールできるよう、色づかいや文字の大きさ、さらには図版に至るまで工夫がこらされていました。さらには期間中のもう一つの目玉として、モバイル制作と名刺づくりの2つのワークショップも開催し、大盛況でした。本学科で学んだ4年間の成果を、より立体的に集大成として多くの方に見ていただくことができ、学生一同感無量でした!



文化創造学科 教授 小南 英昭

2013年2月6日から10日までの5日間、山口県立美術館において文化創造学科卒業展が開催されました。会期中は多くの方々にご来場いただき誠にありがとうございました。

教員にとっては毎年のことですが、学生たちにとっては最後の晴れ舞台。自分自身で設定した「テーマ」と一年間向き合いながら、時には投げ出しそうになりながらも試行錯誤を繰り返して完成

させた作品の数々。一年をかけても満足いく作品には仕上がらなかったかもしれませんが、仲間と共に目標に向かって制作した時間は何ものにも代えがたい経験となったことでしょう。

卒業制作の「テーマ」は、決して卒業するためだけの「テーマ」ではありません。時には自分自身の「テーマ」ともなり得るものです。この春、卒業生たちは新たな目標に向かって羽ばたきました。本学で修得した知識と技術、経験を生かしながら、「テーマ」と共に人生を歩んでほしいと願います。

卒業生の 「今」



国際文化学科 卒業生
藤井 里江

私は現在、航空会社の客室乗務員として日本各地の空の上で働いています。学生時代は国際関係論研究室に所属し、中国への交換留学や日韓国境調査などの活動に挑戦しました。学生時代の経験を通じて多くの人と出会い、多角的な視点や多様な価値観を学んだことが、現在の仕事を選ぶ強い動機に結び付きました。

私たち客室乗務員は、1日に約1,000人のお客様とお会いし、お客様の安全をお守りすると同時に、最高のサービスでおもてなしすることを使命としています。

現在の私の目標は、「お客様の心に寄り添うサービス」を提供することです。サービスは「答え」が一つではないため、お客様お一人おひとりに合ったサービスを提供することは大変難しいです。新人である今は、先輩方の真似をすることで精一杯で、日々挑戦と失敗の連続です。一日でも早く、お客様の心に響くサービスを提供できる客室乗務員になるために、日々学び、前進し続けてまいります。



国際文化学科 卒業生
玉川 佑香

私は現在、神戸市にある求人広告代理店で企画営業として働いています。神戸という街は、異文化が混ざり合い「面白い」街です。そこで、生きていくために働く人や企業、経営者に毎日出逢っています。

限られた時間内に成果を出すことが求められる中で、タイムマネジメントの重要性を意識し、計画を立て、行動できるようになりました。経営者の方々とお会いする中で気付いたことは、どのようなかたちであれ、彼らは学び続けているということです。

また、業界を問わず企業に求められる人材で共通しているのは、好奇心や向上心を持っている人であるということです。今後も変わらず、常に好奇心と向上心を持ち、物事と向き合いたいと思います。

同時に、国際文化学部とセンター大学での留学生活で手に入れた「学ぶ楽しさ」という武器を駆使し、限られた時間内で「面白い」人間になるため、自分に必要なものを吸収し続けることが「今、ここ」での私の仕事だと考えています。



国際文化学科 卒業生
豊政 慧

私は2009年に山口県立大学国際文化学部を卒業し、静岡県の自動車関連会社に入社しました。現在は海外推進部に配属され、ASEAN諸国（主としてタイ・中国の市場）をターゲットに部品の輸出入を担当しています。

入社後のカナダ・トロントでの海外研修（アドベンチャースクール）では、在学中での経験を十分に生かす事が出来ました。韓国短期語学研修や国連大学合同セミナー、ウィルソン先生の異文化比較研究などで培ったコミュニケーション能力は、社会人としての一歩に大きな自信を与えてくれました。

本当に充実した大学生活を過ごすことが出来たのは、友人との出会いや先生方のご指導のお陰だったと改めて感じています。いかに目標を定め積極的に行動するかによって、自分の可能性はどんどん広がっていきます。この瞬間を大事に、貴重な大学生活を楽しんで欲しいです。

卒業生の 「今」

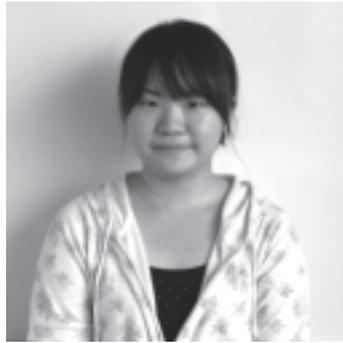


文化創造学科 卒業生
林 奈津美

私は山口県防府市にある会社で店舗のスタッフとして働いています。お店では主に作業服を扱っており、工事現場で働く方たちを相手に接客をしています。

社会人になって4ヶ月が経ちますが、毎日が楽しくてたまりません。私は9月21日にオープンする下関店のスタッフとして配属が決まっています。新人の私が新店舗のスタッフとして参加することに当初は不安だらけでした。しかし1人で出来ることが増え、お客様と会話をすることで、自分の役割をきちんと理解することができるようになりました。月に1回県立大学で行っているプリント T シャツのチラシ配りも私が提案しました。新人だからと遠慮をするのではなく、新人ならではの発想で自分ができることを一生懸命行っています。

後輩の皆さんにも楽しく充実した学生生活を過ごしてほしいと思います。私もまだまだですが、日々の努力を怠らず成長していきます。



文化創造学科 卒業生
沖永 彩

入社して、早くも4ヶ月目が終わろうとしています。初めは、知らないこと、分からないことばかりだった仕事にも少しは慣れてきました。上司や先輩方も、時には厳しく、時には優しく指導して下さるので、働くことの大変さと楽しさを同時に実感する毎日です。

私は、印刷物のデザイン・構成を行う制作課という部署に配属され、毎日Macを使って作業をしています。大学では使用したことのないソフトもたくさん使わなければならないので、初めは慣れないソフトの操作に悪戦苦闘していました。また、大学で使っていたソフトに関しても、今まで知らなかった機能や設定を初めて知ることもたくさんあります。

現在はまだ、仕事内容に慣れる練習として、名刺や封筒、伝票類、企業・施設等で使用される書類などの比較的簡単なデータを作成しています。これから、働きながらセンスや技術を磨いていき、先輩方のような素敵なデザインをお客様に届けられるように頑張りたいと思います。



文化創造学科 卒業生
吉長 実穂

私は3年生の夏から約1年間、フィンランドのラップランド大学に留学しました。今まで触れることのなかったヨーロッパの文化に触れることで、異文化への理解が増したと同時に、日本の文化の素晴らしさを改めて感じる事ができました。

そうした経験から、日本文化の継承に貢献していけるような仕事につきたいと考え、現在では福山市の和菓子屋で働いています。会社では、イベント企画や広告、店舗ディスプレイなどにおいても提案ができ、大学で学んだ企画デザインの知識と経験が活かされています。

経験は一生の財産です。大学生のうち、やりたいと思ったらとりあえずやってみるという姿勢が大切だと思います。そこから自分の将来につながるきっかけが見つかるはずです。

活躍する 学生



国際文化学科 2年生
山口 大輝

これまで私は、授業やスタディーツアーを通して、フィールドワークというものに積極的に参加してきました。キャンパスを飛び出して学ぶことには大きな意味があります。キャンパスを飛び出してみても初めて見えてくるものがあります。学外で学ぶことは強制されることではありません。個人的に感じた話になりますが、大学に入学した当初の目的や目標というのは、大学生活がいつしかバイトやサークルが中心になることで見失いがちです。

しかしキャンパスを飛び出し、国外へ足を踏み入れ、外国人や異文化と触れ合うことで、なぜ自分が国際文化学科に属しているのかを改めて考えると同時に、学べるということへの感謝の気持ちが出てきました。フィールドワークにおいて見るものや感じるものは人それぞれです。一つの答えではなく、そこにはたくさんの答えがあります。どの答えを得るか、何を感じたかは十人十色です。これまでの経験が次へつながり、社会の求めるグローバルな人材となるために、キャンパスを飛び出してみようというのは今後の自分をさらに大きく変えてくれる要因となると思います。

ハワイの日系移民や高齢者との交流から次のステップが広がり、カナダの語学文化研修に参加しました。

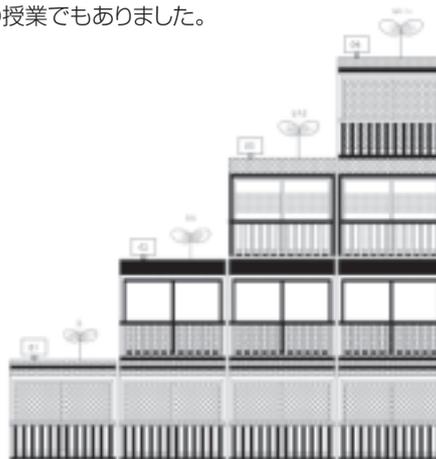


国際文化学科 3年生
宮崎 彩香

「国際協力論b」は、今年から新たに開講された授業で、1冊の本をもとに受講者全員が発表・質疑応答を行います。予習・復習に加えて、授業内でのやりとりが学びに繋がるこの授業を一言で表すなら、「リアルタイムな授業」です。

先輩、後輩関係なく受講者が発表内容や発表態度に対して指摘し合うため、回を追うごとにそれぞれの成長を目の前で感じることができます。また、1冊の本を全員で輪読することで、「こんな読み方もあるんだ!」と多くの発見がありました。後輩のユーモア溢れる発表に刺激を受けたり、自分とは違った深さで本を読んでいる先輩にその場でアドバイスを求めたりできるのも、この授業の魅力です。私自身、この授業をとおして読書や発表に対する意識に変化がありました。

本来は、海外で通用する「標準的な学習スタイル」の習得を目的とした授業ですが、留学を目指す学生だけでなく、「成長したい」と思う人のための授業でもありました。



文化創造学科 4年生 野口由夏

活躍する 学生



文化創造学科 1年生
加藤 史織

私は山口県立大学に入学して、自分から行動する楽しさを日々実感しています。実際に現在、ドリームアドベンチャープロジェクトという、学生が中心となって企画・運営する活動を行っています。宮野の市域の活性化につながる活動を行いたいと考え、メンバー5人で「犬カフェ」プロジェクトを立ち上げました。「犬」を媒体とし、地域同士、そして市域と大学がつながりをもてる交流の場（カフェイベント）を創造したいという思いで少しずつプロジェクトを進めているところです。

先日は「犬カフェ」で提供したいと考えている「犬も人間も食べられるお菓子」の試作を行いました。まだまだ改善点が多いため、今後も試作を行い、イベント開催に向けて定期的に地域に出て、アクションを起こしながら準備をすすめていこうと考えています。

こうした活動を自由に行える環境を当たり前とせず、周りへの感謝の気持ちを持って地域とのつながりをより深め、地域の魅力を引き出していけたらと思っています。



文化創造学科 1年生
河島 萌

私たちは、ドリームアドベンチャープロジェクトで「Halloweeeeeen!! ~ Jack-o'-Lantern と Trick or Treat ~」という企画をさせて頂くことになりました。この企画は、子供たちと仮装して大学周辺地域の家を周った後、かぼちゃランタンを作って交流するという形をとり、地域の人と子供たちが直接触れ合うことを目的としています。現在、今秋の開催に向けて、地域の方々の参加や協力を呼びかけています。

仮装などを楽しむだけでなく、知識を得られる場にしたいと思い、ハロウィンという異文化理解を促すために、子供たちにハロウィンに関連した絵本の読み聞かせも行うつもりです。

地域の方にも聞いたところ、少子化の影響で子供と触れ合う機会が格段に減ったとのことでした。そこで、なかなか子供と触れ合う機会のない地域の方々と子供たちの交流の場を、私たちの手で創り上げることができればと思っています。この企画を通して、県大生と地域の方々とのつながりを深め、県大の行事への参加のきっかけになることを願っています。



文化創造学科 1年生
永瀬 由季

今、私たちは YPU ドリームアドベンチャープロジェクトの1つとして「笑顔でつながるプロジェクト」に取り組んでいます。宮野地域と県立大学をつなげたいという目的で企画したプロジェクトです。宮野地域の皆さんの笑顔を撮影させていただき、展示することで他の人も笑顔にしたい、小さな幸せを大きな幸せに変えることが目的です。

現在 500 人以上の笑顔写真を目標に撮影を始めました。撮影の際、「大切な人への一言」をホワイトボードに書いていただき、そのメッセージとともに撮影しています。展示は「SL やまぐち号」をモチーフに作成し華月祭で行います。また、宮野駅や地域交流センターへの展示も予定しています。笑顔とメッセージを共有し、共通点や絆を見つけることができたらと思います。大学では 200 人の笑顔写真を目標にしています。ぜひ、皆さんの笑顔で宮野を盛り上げてほしいと思います。ご協力よろしくをお願いします。

特色のある授業

学びのスタイルを変える基礎セミナー

文化創造学科 教授 水谷 由美子



本学の全学開講の基礎セミナーでは大学と高校との学習の目的や方法の違いを、理念的な側面や技術的な側面から学習するために、生活や社会、環境やデザインのあるライフスタイルなどの講義を聞きます。

それらをテーマにレポートの書き方などを具体的に学習して、チューターから添削を受けるなど個人的な指導を受けるなど、少数教育とマス教育が組み合わさっています。ここでは学部

特化した内容を紹介します。

国際文化学の学問を星座にたとえて、各自の自発的な学びを見つけるようにテキストを出版しました。また、レポートのみならず、現代におけるニーズに沿ったプレゼンテーションを重視しており、身体および言葉での表現能力を身につけるために、専門家も招いています。

最後に、国際文化学科と文化創造学科に分かれて、専門的なアプローチを経験しながら、身近な人、地域そして世界へと3段階で、情報を発信して行けるようなプレゼンテーション能力を積み重ねながら学習する新しい方法を試みています。

グレードアップする基礎演習

鈴木 隆泰、井竿 富雄、岩野 雅子、浅羽 祐樹
安野 早己、松田 理、ウィルソン・エイミー、金 恵媛



1年生必修の「基礎セミナー」で高校での学び方から大学への学び方に移行した後、2年生は全員が「基礎演習」を受講します。前期4名、後期4名のチームティーチングで、4つのテーマを一巡するなかで国際文化学科

に必要な知識・技術・態度を身につけ、国際的な教養や行動力を養成します。4つのテーマは、「現代日本社会の課題を多角的に読む」、「読んだことを書いて表現する」、「ディベートを行なう」、「英

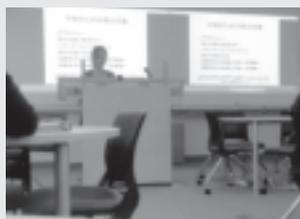
語で日本文化をプレゼンテーションする」です。一つのテーマが終わるごとに全体発表会を行い、4つのチームが学びの成果を共有するという形式になっています。

全体発表会は公開されており、1年生は先輩がどのような学習をするのかを聞きに、また3・4年生は今年の後輩は自分たちとどこが違うのかを見に来てくれます。大学院生や教員も参加し、鋭い質問にどう答えるかが問われます。積み重ねにより、年々グレードアップしていく発表に、教員の方が驚かされる瞬間もあります。

ここで鍛えられた知力や行動力は、3年生の「専門演習」で研究室を選択するための基礎力となっています。

留学前準備の国際協力論b

国際文化学科 准教授 浅羽 祐樹



この科目は、長期留学を希望している学生が、実際に将来留学したときに、単に外国人向けの語学や実技の科目ではなく、専門科目を現地の学生と同じように学修できるようになるために、今年度新設されました。

少人数の演習形式で、徹底した予習や積極的な授業への参加、標準的スタイルが定まっている口頭発表やレポートの書き

方など、交換留学先で「生き延びる (survive)」上で最低限必要なスキルについて、反復してトレーニングしました。

10名の受講生全員が毎回発表するという他の科目とは「質的に異なる課題」をこなしてもらいましたが、15週を終えたとき、一人ひとり、確かに、「質的に異なる成長」が見られました。

勝負事は「準備が8割」といいます。留学「前」の「今、ここ」での準備こそが、留学「中」の学修や留学「後」の人生を変えます。

自分の船は、自分で行き先を決めて、自分で漕いで行く前に、陸での「船」づくりが問われています。

特色のある授業

ホンモノに触れる歴史文化実習

文化創造学科 准教授 木越 俊介



地域の文学・歴史・芸術を理解するには、様々な文献資料の読み方、扱い方・作法、またそれらの歴史的・文化的背景の調査方法を知り、身につける必要があります。

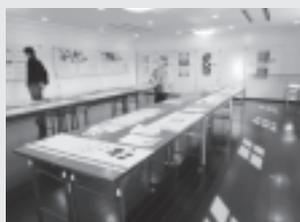
この授業では、文献資料（古典から近代まで）を読むための基礎知識、各種辞書の使い方、和装本・近代文献の書誌（データ取得）、歴史史料（古文書、卷子・掛け軸など）の扱い方、電子文献を含む文献

探索作法などについてレクチャーした上で、実習を行っています。日本文化のエキスパートになるために、徹底的にアタマとカラダを使って、こうした一連の方法をマスターします。

実習内容としては、たとえば巻物のレプリカ（複製品）を使用しながら、実際に広げ、眺め、そして巻き戻すといった一連の作業をします。また、「和本」とよばれるホンモノの古典籍に触れ、修復作業の一環として糸で和綴じを体験するなど、日本文化を文字どおり“体得”します！

アイデアを形にする文化創作実習

文化創造学科 教授 松尾 量子

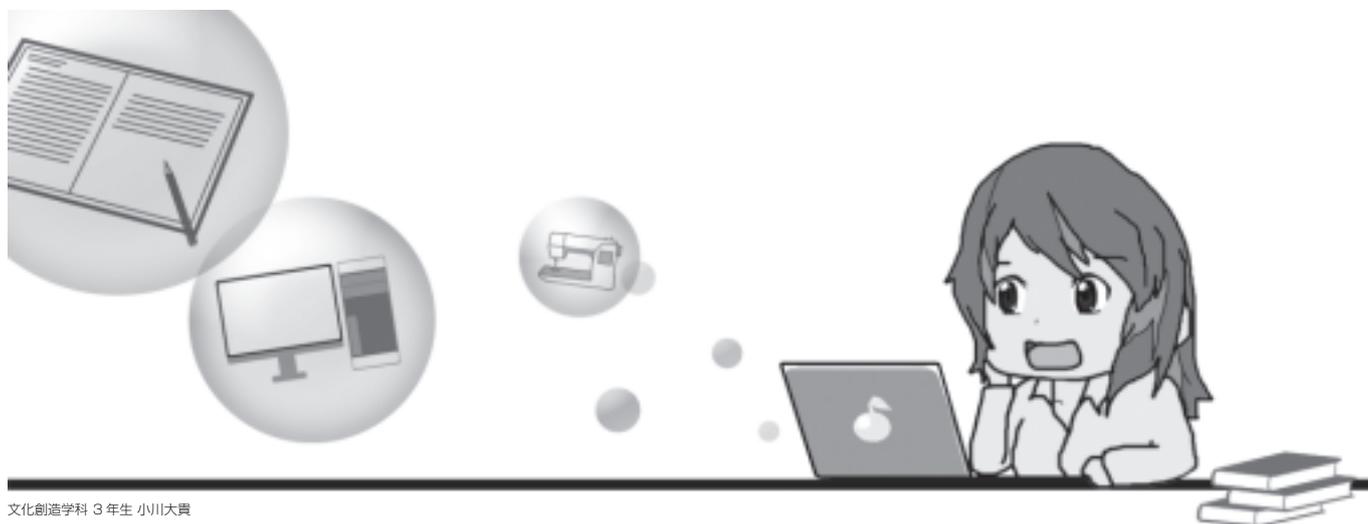


「文化創作実習」では、創作学習を通して文化についての理解を深め、表現能力の幅を広げることを目標としています。

わたしたちの身近にある一枚の布として、てぬぐいを取り上げ、その歴史や使い方の変遷、現状などをリサーチした後に、ふたつの課題に取り組みます。「しかけのあるてぬぐい」は、現在のライフスタイルに即したてぬぐいを考えることを目的とした課題で、顔料を用いた型染め

によって実際にオリジナルてぬぐいを制作します。もうひとつは、山口をアピールすることを目的とした「やまぐちのてぬぐい」のデザインを考えるという課題です。

身近な生活文化をテーマとしてその現状を深くリサーチし、新しい使い方やデザインを思考することで、アイデアを形にするの面白さを体験し、デザインを通じた地域貢献に向かう意識が育つことを期待して授業を展開しています。授業の成果については、山口市菜香亭で展示発表しています。



免許・資格

国語教員 教員

国語教員の養成

文化創造学科 講師 加藤 禎行

文化創造学科では、学科カリキュラムに加えて所定の単位を修得した学生に、国語科の高等学校教諭一種免許状を与えていますが、このプログラムには、例年5名から10名程度の文化創造学科の学生が取り組んでいます。山口県立大学の教員養成プログラムでは、「履修カルテ」と呼ばれる個人面談票と、教職に関する科目の履修記録を学生ごとにファイル化し、半期ごとの個人面談を実施することで、きめ細やかなキャリア指導を行っています。面談等から浮かび上がってくる学生の将来像は、出身地の公立高校や私立高校を目指すケース、また教壇に立てるなら日本中どこでも任地を問わないケース、またあるときには学習塾講師になることを希望するケースと個別に異なります。こうした学生の志望に対応しつつ、教員採用試験に向けた助言や、教職に就いた文化創造学科卒業生による講演会・懇談会の開催などを通じて、文化創造学科は教職志望の学生を支援しています。

国語教員 学生

自主勉強会(模擬授業)

文化創造学科 4年生 渡辺 祐

私たち文化創造学科の教員免許状取得希望者は6月に教育実習に行ってきました。実習を行うにあたり、私たちは実際に教壇に立ち、授業をしなければなりません。そこで、教壇に立つことに慣れるため、また授業をより充実したものにするために、国語科のメンバーで模擬授業をする会を実習前に開き、先生方や下級生たちに授業を聴いてもらいました。会は、様々な意見が飛び交い、大いに盛り上がりました。授業をすることに不安があった人も「この会のおかげで自信が持てた」と、胸を張って実習に臨むことができました。実習後にメンバーに話を聞いてみると、「すごく楽しかった」「実際に教師になりたくなった」等、非常に前向きな意見を多く聞くことができました。私自身、教師を目指しており、先日私立高校から内定を頂くことができました。少人数であるという山口県立大学の強みを生かし、教員と学生が一体となって取り組んだ結果だと思えます。



学芸員 教員

学芸員の養成

文化創造学科 教授 松尾 量子

学芸員とは、「博物館法」において定められた博物館（美術館、科学館、動物園、植物園等を含む）において、資料の収集や保管、展示、調査研究、その他関連する事業を行う専門職員です。

学芸員資格を得るには、博物館法施行規則に定められた博物館に関する科目の単位を修得することが必要です。本学で開講している相当科目の単位を履修することにより、卒業時に学芸員資格を取得することができます。現2年生（平成24年度入学生）からは、法改正により博物館実習を重視した新しいカリキュラムとなりました。今年の秋には、学外で実施する館園実習に先だって、県内や近隣の博物館施設の見学実習に出かけます。

本学では、博物館に関する科目の運営において、山口県立美術館、山口県立山口博物館、山口県埋蔵文化財センター等、地域の博物館施設との連携を推進し、学生が資格取得と共に地域の文化創造についての理解を深めることをめざしています。

学芸員 学生

博物館実習レポート

文化創造学科 4年生 松尾 愛里

私は学芸員資格取得のために必要な授業を受講してきました。中でも印象に残っているのは、3年次に受講した山口情報芸術センターでの博物館実習です。

実習では、無料のPCソフトを使っての映像編集やプログラミングなどをレクチャーする企画や、メディアとダンスを融合した作品のためのワークショップのお手伝いをしました。実習を通して、学芸員とは芸術的・文化的また歴史的に価値のある作品についてより多くのことを読み取り、それを多くの人に伝えていく仕事だと実感しました。

そのためには、人に物事をうまく伝えるスキルや、コミュニケーション能力が必要です。そしてこれは学芸員に限ったことではなく、仕事をしていく上でどんな仕事にも求められるのだと思います。現在私は販売職の内定を頂いていますが、実習で学んだことを生かして人とうまくコミュニケーションをとれるようがんばっていきたくと考えています。

免許・資格

司書・司書教諭 教員

司書・司書教諭の養成 文化創造学科 教授 安光 裕子

本学では、昭和51年(1976年)から司書の養成を、昭和56年(1981年)から司書教諭の養成を行っており、それぞれ三十有余年の実績があります。

司書養成を行っている4年制大学は、中国・四国・九州地方の国公立大学では山口県内にある本学と山口大学の2校だけです。また、山口県内には、私学を含めても3大学しかありません。卒業生は山口県立山口図書館などの公立図書館や島根県立松江農林高等学校の学校図書館などで活躍しています。

今年は、新しい試みとして、7月1日から8月9日までの間、本学附属図書館に時間外利用者のために学生ライブラリアンが配置されました。本課程の学生は、学生ライブラリアンとして資料の貸出・返却や書庫資料の出納、情報検索などの図書館業務を行うことで、貴重な体験することができました。

一方、司書教諭の養成を行っている大学は、山口県内では、本学と私学の2大学だけです。卒業生は、山口市立白石小学校などの学校で司書教諭として活躍しています。

以上のように、本学の司書・司書教諭養成課程は、本学の特色にもなっています。



司書・司書教諭 学生

図書館のパネル発表 文化創造学科 3年生 本徳 菜摘

図書館は資料の収集、整理、保存、提供といった基本的なサービスはもとより、レファレンスサービスや児童サービス、ビジネス支援サービスなど多種多様なサービスを提供する施設です。これらの図書館サービスを提供するために、図書館には、図書館の専門職として位置づけられている司書が配置されています。

本学にはこの司書の資格を取得するための課程があります。この課程では、司書に必要な知識や技術を修得するために、図書館の機能や資料の分類法、情報検索方法などを学びます。

このたび司書課程の学習の一環として、私たち図書館情報学研究室の3年生は、山口市立秋穂図書館まつりにて、今話題の武雄市図書館(佐賀県)に関するパネル発表を行いました。発表にあたっては、武雄市図書館見学の際に学生から集めた感想をもとに、これまでにないコンセプトでつくられた武雄市図書館の問題点などを抽出して、特に資料提供や保存といった視点から考察しました。

本学の司書課程では、講義のほかにも、上記のように学外での見学、その成果のパネル発表などにより、図書館サービスに関する専門的な知識や技術をさらに深める機会が設けられています。



日本語教員 教員

日本語教員の養成 文化創造学科 准教授 古別府 ひづる

1994年4月に日本語教員養成課程が発足してから19年目に入りました。発足当時の受講生数は11名で、法人化以降40名台に突入し、今年度も44名でした。数とは反対に日本語教師になるという強い意志を持った人は、むしろ、減っており、学習支援に介入することへの興味・関心から参加している学生が多くなったという気がします。

目玉である日本語教育実習は、グローバル学生交流事業で来日する大学間交流協定校の韓国慶南大学と中国曲阜師範大学の留学生、約10名を対象に約3週間実施してきました。2週間目あたりに、少しずつ慣れてきた実習生の教授に対し、それまでわからなくて強張った表情をしていた留学生が、使えたと同時に笑った瞬間を見たとき、実習生は、やって良かったと思い、私自身もやって良かったと思います。実習生の教授と学習者の反応という合わせ鏡を通して、私が、実習の意味を確認できる、それが、日本語教育実習の変わらない何かです。

なお、日本語教育実習には海外プログラムもあり、タイ、マレーシア、アイルランド、オーストラリアなどに3週間程度派遣しています。

日本語教員 学生

日本語教育実習(国内実習)レポート 文化創造学科 3年生 明智 亮磨

私はこの実習を通して、学習者のレベルに合わせた授業をする難しさの分かり、これから海外実習に向かう際の自分の反省点と改善すべき点を見つけることができました。

私が、日本語教育実習(国内実習)に参加したうえで、もっとも大変だったことは、学習者にとってどこが難しいのかを考えながら授業を構成したことです。私たちのグループは授業準備の段階から自分達のオリジナリティある授業をして、飽きないような楽しい授業にしたいと話合っていました。教材作りひとつを取り上げても、授業をスムーズに進めることと、学習者にとって分かりやすいのかを考えながら作りました。

授業内では言葉が通じない時に、英語や母国語を使わずに、いかに伝えたいことをしっかりと伝えることの難しさの分かりました。しかしグループで各自の役割を決め、スムーズに丁寧な授業することができたので、学習者も楽しく学んでいた。その光景はとても印象的でした。

さらに最終日の送別パーティでは、スライドショーや歌、そしてソーラン節の発表を行い、大変盛り上がりました。

授業を楽しく進めるうえで、自分自身も楽しむということが大事であることを実感することができました。



学外での活動



フィールドワーク研修

文化創造学科 3年生
有田 菜穂

6月15日から16日にかけて、文化創造学科日本文化系の3年生は、フィールドワーク研修を行いました。

1日目は、まず九州国立博物館を訪問しました。全員でバックヤードを見学し、その後は常設展を参観、太宰府天満宮を参詣しました。普段は見ることのない博物館の裏側を見ることができ、貴重な体験となりました。その後、TSUTAYAに運営を委託している武雄市図書館を訪れました。STARBUCKSが併設されており、館内の全フロアに飲み物を持ち込むことができるなど、非常に特徴的で話題の図書館を楽しみながら、良い点や不便な点を意見交換しました。夜は有明海でしか味わうことのできないエツ料理を楽しみました。

2日目は柳川を中心に自由散策を行いました。旧柳川藩主の別邸である御花や、北原白秋生家・記念館など、思い思いの場所を巡りました。お昼には、名物のウナギを堪能した人も多かったようです。天候にも恵まれ、非常に有意義な2日間となりました。



高杉晋作 奇兵隊結成150周年記念 — 甦る隊士たち — 隊服制作展

文化創造学科 教授
水谷 由美子

2012年8月に萩市と全国晋作会連合会そして山口県立大学が共同で、奇兵隊士の服を再現するための締結式を行いました。山口県立大学付属地域共生センターを通じて筆者と松尾量子教授が受託研究を受けたものです。奇兵隊と同じような若者である学生に制作をしてもらいたいという要望があり、筆者の企画デザイン研究室ゼミ生が中心に制作を実施しました。

再生する隊服は1869年、明治2年に戊辰戦争から帰った後に、下関でリラックスした姿で撮影された7隊士のものです。写真が不鮮明で素材も同様のものを得ることはむづかしいために再現は不可能です。それ故に、現代のセンスや地域資源の柳井縞、デニムなどを取り入れて、その時代の現実性をリデザインしました。

奇兵隊結成150周年に当たる2013年6月7日にファッションショーの形式で記者発表し、萩博物館にて展覧会を実施しました。今後、山口各地にてお披露目される予定です。





テキストの刊行



やまぐちスタディーズ

岩野雅子、シャルコフ・ロバート、
安溪遊地

英語で開講する科目は12科目。そのなかで、山口の地域遺産や文化遺産を題材にした4つの科目をまとめて「やまぐちスタディーズ」と呼び、14名の教員がかかわっています。

「山口の歴史と文化」では、大内文化や山口鷲流狂言、嘉村礒多の文学、明治維新を題材とし、室町時代から昭和初期までの地元の歴史と文化を知ります。「地域文化論」は、街を歩いて見過ごしてしまいそうなモチーフを探したり、和紙の歴史や文化、お笑い講や狐の嫁入りなどの年中行事を学びます。「国際理解」では、150年前に英国留学をした長州ファイブ、大島からの日系ハワイ移民、宮本常一の残したものの、回天や陸奥記念館などを通して世界への窓口を開きます。「生活文化論」は、竹を使った世界的なデザイン、デニムファッション、大内塗、萩焼、萩ガラスと現代デザインとのコラボレーションなど、山口発のクラフトとデザインの領域を扱います。

現在、これまで教授してきた題材をまとめて英語版電子書籍として出版する準備をしています。本学で学ぶ留学生だけでなく、世界の多くの人々にも山口の地域遺産や文化遺産について触れていただける機会になればと意気込んでいます。



『星座としての国際文化学』 (青山社、2013年)

国際文化学部長
岩野 雅子

国際文化学は、文化と文化が交差する場で起こる様々な現象を取り上げ、学際的なアプローチを行う学問です。国際文化学（インターカルチュラル・スタディーズ）のインターは「間」という意味で、文化と文化の間（際：きわ）を指します。日本と外国との間、海外の様々な文化間、世代間、男女間、地域間、集団や組織間において、時空を超え、多様なレベルの文化交差の場で、文化と文化、人と人を仲介し、新たな価値を創造する役割を果たします。

国際文化学で会得するのは、多様な立場からモノ、ヒト、情報を吟味するための学びのスタイルです。本書は国際文化学部にも所属する異なる分野の専門家が、三つのキーワードをもとに、一見バラバラに見えるものの中に関係性を見つけ、新たなしくみやシステムをつくっていく発想や考え方を示す国際文化学の入門書となっています。1年生の「基礎セミナー」で使用します。

グローバル時代に直面した日本の若者に必要な思考のヒントを提示する内容となっています。本書は国際文化学部が編んだ第4冊目の図書です。ぜひお近くの書店やアマゾンでご購入いただければ幸いです。





平成25年度 国際文化学部 客員教授による講義

国際文化学科 教授
安溪 遊地

2013年1月10日(火)に山口県を代表する童謡詩人といわれる金子みすゞをテーマにした客員教授講義を開催しました。講師は、長門市立金子みすゞ記念館主任兼企画員の草場睦弘氏。演題は「金子みすゞのまなざしー見えぬものでもあるんだよ」。

金子みすゞの人生から得られるメッセージや、長門市・下関市にあるゆかりの地の様子、みすゞの詩がアメリカ、フランス、ポーランド、イラン、ネパール、中国、台湾、韓国、モンゴルなど世界各国で翻訳されている状況などについて解説してくださいました。

講演会のちょうど1週間前となる1月2日にテレビで金子みすゞのドラマが放映されたこともあり、学外からも聴講者がありました。3.11後の日本において、金子みすゞのまなざしに注目が集まりました。震災直後の「こたまでしょか」が、テレビ広告の代わりにAC(公共広告)として流され続けたことは記憶に新しいと思います。みすゞが生命や宇宙に対して向けたモノの見方への共感が広まり、心の復興に向けて金子みすゞの詩集を送る運動が開始され、岩手県・宮城県・福島県の約2,000校に送られたそうです。



国際文化学科の オープンキャンパス

国際文化学科 准教授
張 玉玲

6月1日(土)、7月14日(日)、8月25日(日)の三回にわたって、オープンキャンパスが行われました。オープンキャンパス当日、本学や本学科に興味を持つ大勢の高校生たちが家族や友人とともに宮野まで足を運んでくださり、休日のキャンパスはいつも以上の賑わいをみせました。

7月14日には、シャルコフ教授による「グローバルに学び、グローバルに生きよう」、8月25日には、張玉玲准教授による「コトバのまどからひろいセカイをのぞいてみよう」と題する模擬授業が行われました。高校生たちは「県大生」の疑似体験ができ、大学での学び方に対して満足した顔を見せてくれました。

相談コーナーでは、本学科の上級生たちが、情熱をもって高校生たちの相談に応じてくれました。少し年上の先輩たちから直接本学科の特徴や入学試験、留学などについて説明を受け、自分の経験に基づいて「学び方」について伝授する在学生たちの活躍ぶりに、高校生から大学生への時間の流れが見えるような感じがしました。

それぞれ短い時間でしたが、高校生たちに本学科の魅力が伝わったと思います。来年春の入学式で再会できることを楽しみにしています。



文化創造学科の オープンキャンパス

文化創造学科 准教授
池田 史子

6月1日(土)「夏の初めのオープンキャンパス」、7月13日(土)「真夏のオープンキャンパス」、そして、8月25日(日)「夏の終わりのオープンキャンパス」が行われ、西日本一円からお集まりいただいた高校生や同行者の方にお会いできる機会がありました。それぞれの回で、学生ボランティアスタッフが、会場設営、演習や実習成果の解説、高校生目線に立った学生生活発表、相談コーナーでの対応など大活躍でした。

7月には、木越俊介先生の模擬授業「ミタテノタノシミ」、倉田研治先生の模擬授業「地域文化っておもしろいーWeb・メディアの表現からー」、8月には古別府ひづる先生の模擬授業「日本語の特徴、省略と談話の結束性」、小橋圭介先生の模擬授業「世界は「色」であふれている」が行われ、大好評でした。

高校生のみなさんの進路設計に役立ち、来年の春にこのキャンパスで再会できることを、在学生・教職員一同願っております。

イベント紹介

詳細については国際文化学部のホームページで随時お知らせします。ぜひご来場ください。

・2013年10月17日(木)16:10-17:40:「生活文化論」公開授業・国際文化学部主催講演会
安倍昭恵総理夫人を客員講師に招きます。

・同年10月25日(金)14:30-16:00
国際文化学部客員教授講義

地域活性化の仕掛け人と言われる本田勝之助氏(地域プロデューサー)を招き、グローバルな視点でローカルな地域資源に注目する手法について講義していただきます。

・同年12月14日(土)国際文化学科
13:30-16:00「第10回マルチリンガルスピーチコンテスト」

大学F204教室で、県内外の高校生や大学生、社会人が多言語でスピーチを競います。

・同年12月15日(日)18:30-20:00
文化創造学科「デニム・ファッションデザインコンテスト in 山口」

山口県立美術館で、高校生、専門学校生、県内外の大学生が「クリスマスシーズンにパーティで着たいファッション」をイメージしたデザインを競います。

・2014年1月25日(土):グローバル人材育成推進事業「域学共創フォーラム」
「域学共創」学習プログラムや海外スタディツアーの成果発表を行います。

・同年1月下旬から2月上旬:国際文化学科卒論発表会、文化創造学科卒業展
4年生の集大成の場となります。

・同年7月5日(土)・6日(日):日本国際文化学会第13回全国大会